

令和7年度 第3回東川養護学校 学校運営協議会（2月26日） 会議録

1. 開会および学校長挨拶

◇学校の役割について「子供たちが社会で生きていくために必要な力を身につける場所」とし、単なる授業の実施にとどまらず、地域と連携して新しい価値を創出していきたいと述べた。また、「イノベーション」の重要性を強調し、本日の協議が令和8年度のグランドデザインのベースになるということを中心に挨拶を行った。

2. 報告・説明事項

（1）今年度の地域との取組と地域資源を活用した取組について副校長より報告した。

◇各学部における地域連携の成果を報告した。

- ・小学部：卒業生の保護者による英語遊びや、ALTを招いたクリスマス会を通じ、異文化に親しむ活動を実施した。
- ・中学部：町内会と連携した清掃活動や、東川町の特産品（米・大豆・水・写真）をテーマにした体験学習を展開。東川中学校との交流も継続してきた。
- ・高等部：農福連携として町内企業での椎茸栽培実習、帯広美術館とのオンライン教室、東川高校との交流などを通じ、社会自立に向けた実践的な学びに取り組んだ。
- ・寄宿舎・PTA：外部講師によるエアロビクスや、手話を楽しむ会と連携した学習会など、地域資源を幅広く活用した取組を行った。

（2）令和7年度いじめの把握のためのアンケート調査結果について教頭より報告した。

◇年3回のアンケート結果についての説明を行った。各回1名程度「嫌な思いをした」と回答して児童生徒がいるが、組織的な対応により、深刻な事態には至っていない。今後の課題として、自分からSOSを出せない子供たちへの支援や、信頼関係に基づいた日常的な観察の強化が挙げられた。

（3）令和7年度学校評価の状況について

◇令和7年度学校評価（教職員、保護者、児童生徒の3者による評価）が副校長より報告した。

- ・強み：「一人一人に寄り添った丁寧な指導」が全者から高く評価された。特に寄宿舎と学校の連携については、保護者から満点（4.0）の評価を得た。
- ・課題：教職員の業務負担の偏り（2.7）が最低値となり、献身的な姿勢に依存する危うさが浮き彫りになった。また、児童生徒の自発的な挨拶についての自己評価の低下や、夏季の空調設備・トイレの洋式化（ウォシュレット）といった施設改善への強い要望について確認された。

◇学校評価を踏まえた次年度の重点事項について併せて説明を行った。

- ・自発的なコミュニケーションの育成：挨拶を「認められたい欲求」の充足と捉え、全校で賞賛する環境作りを行っていく。
- ・業務改善とウェルビーイング：生成AIやICTを徹底活用し、事務作業を簡素化していく。捻出した時間を子供と向き合う時間や教員の心身の充実に充てる。
- ・施設環境の改善：プール、エレベーターの修繕、トイレ環境の改善など、具体的ニーズに応じた予算要望を継続する。

3. 令和8年度グランドデザインについて校長より説明を行った。

◇報告及び協議された内容を踏まえたかたちで、次年度の重点事項を説明した。組織の一員としての自覚、個人プレーではなく、「東川養護学校の教職員」という組織の一員であることに誇りを持ち、組織的な視点で地域や生徒に貢献する姿勢を求めたグランドデザインを説明した。

1) 教育目標と学びの姿：質の高い教育と「できること」の創出

- 目標の継続： 目指す学校・生徒・教職員の姿は前年度を継承しつつ、個々の進路を見据えた「質の高い教育」の実現を最重点に置いている。
- 「経験」から「資質・能力」へ： かつての「経験させること」に主眼を置いた教育から、現代は「何ができるようになったか」という資質・能力の向上を重視する。具体的なキャリア形成を支援する授業づくりを推進する。
- ICTの活用： 本校は全道でもトップクラスのICT活用校である。これを児童生徒の「選択肢の提示」や「意思表示」に役立てたい。

2) 学校運営の基盤：安全管理とコミュニケーション

- 「かくれんぼう」と「予防」： 報告・連絡・相談に加え「確認」を重視し、実を伴う流れを作る。また、学校が安定して進むための事故予防と環境整備（空調の点検等）を徹底する。
- 大人が手本となる： 子供は大人の真似をして育つため、教職員の適切な言葉遣いを徹底する。特に「お願いします」「ごめんなさい」「ありがとう」の3つの言葉を、職員間及び対児童生徒で大切にできる文化を醸成する。

3) 教職員の働き方と「創造的な余白」

- 生成AI、ICTによる余白の創出： 働き方改革の一環として、生成AI、ICT活用により業務を効率化し、教育の質を高めるための「創造的な余白」を生み出していく。
- 内発的動機づけの重視： 教職員へのアンケートを通じ、「やりたいこと」に基づいた校内人事や授業づくりを行う。自ら望んで取り組むことで、主体的かつ継続的な活動、深い理解、自己肯定感の向上につなげたい。

4) 組織としての学校：連携と誇り

- 保護者との連携： 多様な考えがある中で「子どもを中心に置く」ことを共通認識とし、情報共有を密にする。特に関わりが薄くなりがちな進路相談等の場面で、保護者が後悔しないような充実した懇談体制を築いていきたい。

4. 協議会での各委員からのコメント

◇協議会では、各委員の方々から多角的かつ詳細な意見が出された。

- アンケート結果の経年変化や改善状況についての質問がなされた。学校側が「積極的認知」を進めている背景を理解しつつも、保護者の視点から、子供たちの変化がどのように結果に反映されているか、またそれがどのように改善に向かっているのかという実感を問う意見が出された。
- 学校内の相談体制について、担任以外の教職員にも相談できる環境づくりが不可欠であることが指摘された。児童生徒と担任が「相容れない関係」になった場合の逃げ道として、客観的に見守れる大人の存在の重要性について意見があった。また、発達段階によっては自分の苦痛を言葉で表現できない児童生徒も多いため、アンケートだけに頼らず、教職員の日常的な「観察」と「情報共

有」こそが、いじめの兆候を捉える鍵であることが強調された。

- 自身の関わるスクールの経験から、教員が代筆・代答するアンケートの有効性について質問があった。言葉での表出が難しい児童生徒の本心をどう汲み取るかという、特別支援教育における評価の難しさに言及された。また、学校で行われている「英語で遊ぼう」等の魅力的な地域との活動を、自身の関わるスクールとも共有・交流できないかという前向きな連携・提案があった。
- 東川町教育委員会の立場から、町全体のいじめ対策の現状（小・中学校でのアンケート実施状況や保護者からの相談が第一窓口になる傾向など）が説明された。部活動の地域移行が進む中で、地域クラブで起きたトラブルを学校がどこまでケアすべきかという、新たな時代の境界線の難しさについても触れ、学校と地域の密接な連携の必要性を再確認した。
- 「内発動（内発的動機づけ）」は、児童生徒だけでなく大人（教職員）にとっても非常に重要である。個々のやりたいことや意向に応じて学校内での働き方や配置を柔軟に変更しているという点は、非常に意義深い取組である。
- 教員の負担軽減が叫ばれる中で「学習評価や成績処理」が挙げられているが、特別支援学校においては、その自動化が難しい側面がある。一般の小学校等のように点数を自動処理するのとは異なり、特別支援学校では教師が子どもの行動を詳細に「観察」し、「具体的な回数の変化」などを記録して評価に落とし込む必要がある。このプロセスは自動化しにくく、手間がかかる課題がある。

5. 開会および学校長挨拶

◇委員の方々への長時間の出席に対する感謝とともに、今後も個別の対話を通じて連携を深め、教育活動をより充実させていきたいという、継続的な協力関係への願いを込めた挨拶を行った。

